

『テントは水浸しに』 12歳のラハフさん (4月後半)

「家はジャバリア難民キャンプにありました。あの朝、学校に行こうとしたらすごい音がして、最初は何かわかりませんでした。戦争が始まったとわかったのはずっと後です。家で2週間過ごしました。

そしたらイスラエル軍が、ジャバリアに入るからワジ・ガザよりも南に行けというビラをまきました。私たちはハンユニスに逃げました。(ここでラハフさんはいろいろと思いだして泣き出しました。)

マットレスがなく床に直接寝ました。爆撃がどんどんひどくなり、ズワイダに逃げました。(声も震えだし、涙があふれて来た。)

生活は苦しくて、食べ物はなく、水もちょっとしかありません。水が買えませんでした。

でもイスラエル軍がハンユニスにまで来ました。私たちはディールエルバラフに逃げました。そこでテントで暮

らしています。テントにはしばらく屋根がなく、とても寒かったです。寝ているときに雨が降ってきて、テントが水浸しになりました。

今はテントの中はひどく暑いんです。テントでラマダンになりました。去年のラマダンとは全く違います。

去年はとても幸せでした。家を飾り、毎日ご馳走を食べ、モスクに行きました。

イード(ラマダン明けのお祝い)も悲しかったです。新しい洋服を買うことができず、お祝いもできません。でもラマダンとイードに「創造的教師センター」の人たちが来て、楽しい遊びやゲームをしてくれました。

絵を描いたり、お話を聴いたり、お人形でも遊びました。この活動が終わりとてもさびしいです。」(子ども支援の活動は、多くの子どもに提供するため、場所を移して行っています)

『妹と二人取り残されて』

7歳のMくん、サポートスタッフからの報告 (4月)

Mくんはガザ市に家族と住んでいましたが、戦闘激化でハンユニスの海岸地帯に避難しました。

苦しい避難行の途中、ガザの南北を分けるイスラエルの検問所で父親が逮捕され、母親とはぐれてしまったのです。男の子は幼い妹と二人で取り残されました。

その後、CFTAが母親を探し出して、家族に滞在する場所を提供しましたが、男の子は心身ともに疲弊し対人関係にも障害が出ました。体重が減り、内向的になり、夜尿症になり、恐怖と不安で泣き続け、他の子どもと一緒に活動に参加することを拒否しました。

スタッフが、個別カウンセリングやリクリエーション活動、学習支援などを続けた結果、数か月後には活動に参加できるようになりました。いまではスタッフの助手的な役割も担っています。

お母さんは「息子の性格が変わり、私との関係もずっと親密になりました。皆さんのおかげで、息子の人生は変わると信じています」と言っています。



上) お弁当を受け取った脚を負傷した少年

左) 炊き出しを待つ子どもたち



5月15日現在、ガザでは3万5000人以上の人が死亡し、7万8000人以上が負傷。1万人以上が行方不明となっています。1948年にイスラエル建国により「ナクバ」と呼ばれる70万人以上のパレスチナ人が追放された時以上の惨劇がおこっています。爆撃による破壊、物資搬入阻止による飢餓の中で、人々はどのような経験をしたのか。何を思っているのか。当会の現地職員や事業関係者の経験をご紹介します。その思いを受けとめてください。



人々の経験と思いを聴く

『世界はみているだけ』

保健コーディネーター
ルブナさん (5月16日)



けます。活動を支援して下さる日本の皆さんに感謝しながら。

私はガザ市内にとどまり、南部に避難することは考えませんでした。どこ行っても安全な場所はないと考えたからです。

イスラエル軍の攻撃が近づき、家も半分壊されたので、いまはガザ市の西側に避難しています。10日ほど前には、停戦になるのではと多くの人が期待しましたが、「ぬか喜び」で、皆ふさぎ込んでいます。ラファは地上侵攻され数十万人が避難し、検問所も制圧されて物資が入らなくなりました。北部でも急激な物資不足が起こっています。そのため、水の値段は4月の5倍、トマトは30倍、卵は1個300円もします。

昔に戻ったような生活を強いられています。燃料がないので料理には木切れや紙を燃やすしかありません。お茶を入れるのも大仕事です。飲料水を買ったとしても、ロバ車で運ぶしかありません。半年以上停電したままなので明かりはなく、携帯のフラッシュライトを使いますが、その充電も簡単ではありません。わが家にはソーラーパネルがありましたが破壊されました。インターネットカード(ガザでは通常のWiFiが使えないため、インターネット通信を買うためのプリペイドカード)も値上がりしましたが、つながることがほとんどです。

私たちはどこにも安全な場所もなく、水もなく、爆弾だけでなく飢餓でも殺されています。これはジェノサイド(大量虐殺)です。でも世界中の人たちは、市民社会が消し去られ、私たちが死んでいく状況を見ているだけです。私たちは人間で、ただただ平和に生きたいのに。」

(インターネット接続のため、屋上から話してくれたルブナさんの声のうしろで、偵察機の音が聞こえています。)

「女性と子どもの状況をまずお話しします。」

この7か月で13,000人以上の子どもと9,000人以上の女性が犠牲になりました。ガザでは現在も3万人以上の妊婦がいます。

国連はガザ南部だけで65,000人の子どもが障がいを負い、5歳以下の90%が2つ以上の疾病、2歳以下の8,000人が重い栄養失調と言っています。また69万人の女性と少女は生理用品が入手できず、3万人の妊婦の健康状態が悪化しています。

2歳未満の90%、妊娠・授乳中の女性の95%が

栄養失調の幼児と母親



深刻な食料不足になっていて、子ども346,000人と母親160,000人が栄養失調の予備軍です。毎日400人が出産していますが、出産サービスを提供しているのは小さな病院2つのみ。

数日前、私たちはガザ市で簡易の一次保健施設を開設しましたが、あまりにも多くの人々が来訪したため、半分の人たちを断らなければならませんでした。それでも私たちはできることをやり続

追悼

ハーシム・ガザレさん

私たちの30年来のかけがえのない友人、アトファルナ・クラフトの木工の責任者・指導者のハーシム・ガザレさん(58歳)が5月13日に亡くなりました。

彼は、避難することを拒否して、ガザ市のトファハ地区の家に留まっていたが、その家にF16からミサイルが2発発射されたそうです。

ハーシムさんと夫人が亡くなり、同居している3人の娘と2人の息子は負傷しました。夫人以外の家族は、全員ろう者です。ハーシムさんはガザの聴覚障がい者のリーダーとして、アトファルナろう学校の精神的な支柱でもあり、20年以上前に「デフクラブ」を設立しました。

2人の娘はろう学校の先生になり、1人は現在南部

来日時のハーシムさん(1995年)



で活動中です。

1995年に当会の招きで来日し、日本の聴覚障がい者と交流を持ち、また札幌から福岡までの各地で、ガザとアトファルナろう学校のことを話してくれました。

10年前、2014年の戦争の後で、戦争中どんな暮らしをしていたかを手話で話してくれました(当会のホームページで視聴できます。右下のQRコード)。

その時に、「死ぬときは家族と一緒にがいいから家に留まった」と言っていたことを思い出します。



YouTube
インタビュー動画は
こちら→



『生き延びるため、死から逃れるために』 当会現地職員ハリールさん (5月15日)

ハリールさんはこの7か月間、避難している人たちを支えるために働き通しで、40キロも体重を減らしました。ラファでは国連と交渉をして燃料を確保し、炊き出しや給水の陣頭指揮を続けてきました。また人々のために電源やインターネットも確保してきました。疲労がたたり5月初めにはA型肝炎にかかってしまいました。

しかし両親や兄弟を爆撃で亡くした妻と幼い3人の子ども、自分の親兄弟の生活も支えています。日本の市民に現状を知ってほしいと、日々SNSを通して現地の声を伝えてくれています。

「ラファからハンユニスに移ってきました。イスラエル軍はすべての人にラファから退避するように命じています。50万人と言われる人たちが1週間足らずのうちにラファを出て、ハンユニスやディールエルバラフに移ったのです。



『たくさん死を見て、泣くこともできなくなった』 教育事業コーディネータ アブードさん (2月22日)

「12月の終わりに隣の家が爆撃され、私のアパートの上に倒れました。3階建てのアパートには40人以上が住んでいて、一人が死亡し、私も頭や背中に傷を負いました。

一緒にいた兄に搬送され、病院で縫合をしてもらいました。妹の夫も大腿部に大けがを負いましたが、病院はけが人で溢れてベッドが足りず、床で治療を受けました。病院にも薬局にも鎮痛剤や抗生物質はなく、冬の寒さで痛みがひどく眠れない日が続きました。

外壁がなくなり、家具が外へ飛んで行った半壊の家にしばらく住んでいましたが、ハンユニスへの攻撃が強まったので、負傷した妹の夫を車いすに乗せて避難しました。

道路はデコボコで車いすを担がないとならず、また人が大勢避難する中で恐怖に震えている妹を見失わないため手を引いて歩く大変な状況でした。その時に同僚と偶

ハンユニスの海岸沿いにはものすごい数のテントが立ちました。生き延びるため、死から逃れるためです。ガザでは私たちは追い詰められています。人々は持ち金を全部はたいて食料を買ってここにきました。

援助物資のトラックがくるまで待てないからです。でもここがダメになったら、私たちはどこに逃げたらよいのでしょうか。

戦争が続く限り同じことに直面します。いつまで恐怖と苦しみには耐えないといけないのでしょうか。いつまで子どもや家族のことを心配しなければならぬのでしょうか。状況は日に日に悪化しています。

皆さん、私の話を聞いてくれてありがとう。」



然に出会い、声をかけてもらったことで元気を取り戻し、何とか避難場所までの道を歩くことができました。

避難先では狭い空間に人が溢れ、インフルエンザが広まり、水は1週間に1度しか入手できず、1か月同じ服を着ていました。寒くなったので古着を買いましたが、びっくりするような値段でした。避難している最中には見ず知らずの人も含めて本当にたくさんの人に助けられました。私は1型糖尿病患者です。

ラファでは従弟を失いましたが、あまりにも多くの死を見て泣くこともできなくなりました。

息子の友達だった小学生の女の子の爆撃でバラバラになった遺体を集めて埋葬したことがあります。そのお母さんは妊娠7か月目でしたが、遺体とは違う方向に胎児の遺体が落ちていた様子が目に焼き付いて忘れることはできません。」

イスラエル国内のパレスチナ人の状況

ガザの惨状の陰で、イスラエル国内のパレスチナ人はどうしているのでしょうか。

イスラエル国内には170万人以上のアラブ系市民が住んでいます。この人たちは「ナクバ」時に故郷にとどまった人たちの子孫です。こうしたイスラエル国籍を持つパレスチナ人女性たちからお話を聞きました。

Nさん「私は30年以上ネゲブ地方のベルシェバ市に住んでいて、これまで露骨な差別を感じることはなかったんですが、10月以降はしばしば経験しています。私は世俗的なのでヒジャーブ（髪を覆う

スカーフ）もしていませんが、街で「イラクやシリアに戻れ！」などと罵倒されることがあります。ネゲブ地方にはガザからお嫁に来たパレスチナ女性たちがたくさんいますが、この人たちは10月以降ガザの実家に電話をすることもできず、肉親の安否確認さえできないのです」

Fさん「イスラエル北部で教員をしています。生徒はアラブ系ですから、ガザのことをとても気にしています。でも役所から『ガザのことについて何も言うてはいけません』と命令されていて、子どもたちの質問に答えることさえ許されません。SNSで、「ガザに平和を」といった投稿に「いいね」しただけでも解雇されたり、逮捕されます。」